



Title	<翻訳> マシャード・デ・アシス「棒の事件」
Author(s)	平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2026, 20, p. 7-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106118
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マシャード・デ・アシス

「棒の事件」

平田 恵津子

はじめに

以下に訳出した短篇小说「棒の事件 (O caso da vara)」はブラジル文学を代表するマシャード・デ・アシス(1839-1908)の作品である。1891年、リオデジャネイロで発行されていた新聞 *Gazeta de Notícias* に掲載され、1899年、マシャードの作品集 *Páginas recolhidas* に収められた。

マシャードが書き残した約 200 の短篇小说のなかでも常に傑作としてあげられるこの作品は、マシャードがブラジルの奴隷制を題材にして執筆した数少ない作品のひとつでもある¹。奴隷制下のブラジルの首都リオデジャネイロで暮らす中産階級の未亡人の家を舞台としてわずか1日のあいだに起きる緊張感あふれる物語が描き出すのは、単に奴隷制の残酷さというよりむしろ、権力と支配の構造など場所や時代といった特殊性を超えた人間と社会の本質的問題である。物語の最後にダミアンが未亡人に棒を手渡す場面は、マシャードの悲観的な人間観に裏打ちされたシニシズムに満ちており、マシャード作品の中心的なテーマであるエゴイズムが鋭くえぐり出されていることを指摘しておきたい。

「棒の事件」 (o caso da vara)

ダミアンは8月のある金曜日の午前11時、神学校から逃げ出した。正確な年はわからないが、1850年より前だった。数分後、彼は恥ずかしそうに立ち止まった。驚き、恐れおののき、まるで逃亡者であるかのような足取りのその神学生が他人の目にどのような印象を与えていたか予想していなかったのだ。道を知らなかったので行ったり戻ったりしていたが、ついに立ち止まった。どこへ行くべきだろう？家へは帰れない。父親がいて、彼に厳しい罰を与えた後、神学校へ連れ戻すだろう。避難場所は定まっていなかった。なぜなら脱走はもっと後に予定されていたからだ。予期せぬ事態がそれを早めた。どこへ行くべきだろう？彼は代父のジョアン・カルネイロのことを思い出したが、この代父は無気力な怠け者で、自ら進んで役に立つようなことはしないだろう。そもそも彼こそがダミアンを神学校へ連れて行き、校長に紹介した人物だった。

「私はあなたに、将来偉大な人物となる者を連れて参りました」彼は校長に言った。

「おいでなさい。偉大な人物よ。あなたが謙虚で善良でもあるならば。真の偉大さとは、素朴なものなのです。若者よ…」校長は応じた。

こうして彼は入学した。ほどなくして、その若者は神学校から逃げ出した。

ここで私たちは、今、通りで、驚き、戸惑い、避難場所も助言も見つからずにいる彼を目にしている。彼は記憶をたどって、親戚や友人の家を思い返したが、適当な場所は思いつかなかった。突然、彼は叫んだ。

「リタ夫人に頼もう！彼女がぼくの代父を呼び出して、ぼくを神学校から出してほしいと伝える…そうすれば多分…」

リタ夫人は未亡人で、ジョアン・カルネイロに愛されていた。ダミアンはその状況を漠然と理解していて、それを利用しようとした。彼女はどこに住んでいただろうか？彼はあまりにも動揺していたため、数分たつてようやく彼女の家を思い出した。それはカピン広場にあった。

「なんてこと！いったいどうしたの？」リタ夫人は、横たわっていた長椅子に座り直しながら叫んだ。

ダミアンが恐怖に駆られて家に入ったところだった。家にたどり着いた瞬間、神父が通りかかるのを見かけ、入口を勢いよく押したのだ。幸い、ドアは鍵も掛け金もかかっていなかった。中に入ると、格子越しに神父の様子をうかがった。神父は彼に気づかず、歩き去った。

「何ごとですか、ダミアンさん？」女主人が再び叫んだ。彼女は今になってようやく彼に気づいたのだ。「ここで何をなさっているのですか！」

ダミアンは震えながら、ほとんど声も出せない様で、怖がらないでください、何でもありません、すべて説明しますからと言った。

「落ち着いて、それから説明してください」

「最初に申し上げますが、ぼくは何の罪も犯していません。誓って言います。でも待ってください」

リタ夫人は驚いて彼を見つめ、レース用クッションを前にして部屋の周りに座っていた子供たちは、家の子も外の子も皆、糸巻きと手を止めた。リタ夫人は主にレース編みや刺繍を教えることで生計を立てていた。若者が息を整えている間、彼女は女の子たちに作業を続けるよう命じ、待った。ついに、ダミアンはすべてを打ち明けた。神学校が嫌で仕方なかったこと、自分が良い神父にはなれないと確信していたこと。情熱的に語り、彼女に自分を救ってほしいと懇願した。

「でもどうやって？私には何もできないわ」

「できます、望みさえすれば」

「いいえ」彼女は首を振りながら答えた。「私はあなたの家族のことには関わらないわ。ほとんど知らないのに。それに、あなたのお父さんは、怒りっぽいそうではありませんか！」

ダミアンは途方に暮れた。絶望して、彼女の足元にひざまずき、その手に口づけした。

「絶対にできます、リタ夫人。どうか、神様の愛にかけて、あなたが最も神

聖に思うものにかけて、ご主人の魂にかけて、私を死から救ってください。なぜなら、もしあの家に戻るくらいなら、私は命を絶つからです」

リタ夫人は、若者の懇願に気をよくして、彼を別の感情へ導こうと試みた。神父としての生活は神聖で美しいものだと言った。時間が経てば、嫌悪感を克服したほうがよいとわかるだろう、そしていつの日か… いいえ、決して、絶対に！ダミアンは首を振り、彼女の手口に口づけしながら、それは自分の死だと繰り返した。リタ夫人はさらに長い間ためらっていたが、ついに、彼になぜ代父に会いに行かないのかと尋ねた。

「ぼくの代父？あの人は父さんよりもっとひどい人です。ぼくの話をお聞きしないし、誰の話もお聞きしないでしょう…」

「聞かない？」リタ夫人はプライドを傷つけられてさえぎった。「ふうん、彼が話を聞くかどうか私が見せてあげましょう…」

彼女は奴隷の少年を呼びつけ、すぐジョアン・カルネイロさんの家へ行って彼を呼んでくるようにと叫んだ。そして、もし彼が家にいなければ、どこに行けば会えるか尋ね、彼に急ぎの話があることを走って伝えに行くよう命じた。

「さっさと行きなさい」

ダミアンは深く、悲しげなため息をついた。彼女は、権威をかざして命令したことをごまかすかのように、若者に、ジョアン・カルネイロ氏は夫の友人で、彼女に生徒たちを何人か紹介してくれたのだと説明した。その後、若者が出入り口にもたれかかって悲しそうな様子だったので、その鼻をつまんで笑いながら言った。

「さあさあ、へば神父様、ご安心ください。すべてうまくいくでしょうから」

リタ夫人は洗礼証明書では40歳だったが、見た目は27歳だった。彼女は人当たりが良く、活発で、陽気で、よく笑う人だったが、必要な時には悪魔のように怒ることもあった。彼女は若者を元気づけようとした。そしてそれは、状況にもかかわらず、さほど難しいことではなかった。間もなく、ふたりは笑い合っていた。彼女は彼に小話を語り、彼にも別の小話を求め、彼はそれを独特のおかしみを交えて語った。そのうちのひとつは大げさな仕草を伴った途方も

ない話で、リタ夫人の弟子のひとりを笑わせた。その女の子はすっかり作業を忘れ、若者を見つめ、その話に耳を傾けていたのだ。リタ夫人は、長椅子のそばにあった棒を手に取り、彼女を脅した。

「ルクレシア、この棒がわかるわよね！」

少女は頭を下げて、一撃をかわそうとしたが、一撃は来なかった。それは警告だった。もし日が暮れても作業が終わっていなければ、ルクレシアはいつもの罰を受けることになる。ダミアンは少女を見た。彼女は痩せこけた黒人の女の子で、取るに足らない存在だった。額には傷跡があり、左手には火傷の跡があった。11歳だった。ダミアンは、彼女が咳をしていることに気づいた。それは会話を中断しないようにと、音を立てずに内側でする咳だった。彼はその黒人の少女をかわいそうに思い、もし彼女が作業を終わらせられなかったら、彼女をかばってあげようと心に決めた。リタ夫人は彼女を許してくれるだろう…それに、彼女は彼の話面白がって笑ったのだ。だから悪いのは彼だ。もし、冗談を言うことが罪だとしたら。

そのとき、ジョアン・カルネイロが到着した。彼はそこで代子に気づくと、青ざめた。そして、リタ夫人に視線を向けると、彼女は何の前置きもなく、その若者を神学校から出してやる必要があると彼に告げた。その若者は聖職者に向いていない、粗悪な神父がひとり増えるより、神父がひとり減る方がましだと。世俗にあっても、我らが主を愛し、仕えることはできるのだ。ジョアン・カルネイロは驚愕し、最初の数分間は何も言い返せなかった。しかし、やがて口を開くと、代子が「見知らぬ人たち」に迷惑をかけにやって来たことを叱責し、罰を与えると宣言した。

「罰を与えるですって！とんでもない！」リタ夫人が口を挟んだ。「なぜ罰する必要があるの？さあ、さあ、彼の父親と話をしてきてください」

「保証はできません。おそらく無理ではないかと…」

「できますよ、私が保証します。もしあなたが望むなら」彼女はほのめかすような口調で続けた。「すべてうまくいくでしょう。たくさんお願いしてください、彼は折れるでしょう。さあ、ジョアン・カルネイロさん、あなたの代子

は神学校には戻りません。戻らないとあなたに言うておきます…」

「しかし、奥様…」

「さあ、さあ」

ジョアン・カルネイロは出かける気になれず、留まることもできなかった。ふたつの相反する力のあいだで立ちすくんでいた。

要するに、彼にとっては、その若者が聖職者、弁護士、医者、あるいは他の何者になろうが、それがたとえ浮浪者であっても、どうでもよかった。しかし最悪なのは、結果の見えないまま、彼の父親の最も内なる感情と激しい戦いを強えられることだった。そして、もし結果が否定的であれば、リタ夫人との別の闘いも待っていた。彼女の最後の言葉は脅しだった。「彼は戻らないってあなたに言うておくわ」必然的に大騒ぎが起こるはずだった。ジョアン・カルネイロは瞳孔が乱れ、まぶたが震え、荒い息づかいをしていた。彼がリタ夫人に向けていた視線は、微かな非難の光を帯びた嘆願のまなざしだった。なぜ彼に別のことを頼まないのか？なぜ雨の中、ティジュカやジャカレバグアまで歩いて行くよう命じないのか？しかし、そうではなくて、息子の進路を変えるようその父親を説得せよだなんて… 彼はその老人のことをよく知っていた。彼の顔に水差しを投げつけてもおかしくない男だ。ああ！もしその若者が突然、脳卒中で倒れて死んでしまったならば！それは解決策だ—確かに残酷だが、決定的だ。

「それで？」リタ夫人はしつこく尋ねた。

彼は彼女に待つよう手で合図をした。あごひげをなでながら打開策を見いだそうとしていた。

天におられる神よ！教皇が教会を解散するか、あるいは少なくとも神学校を廃止する勅令を出せば、すべてがうまく収まるだろう。ジョアン・カルネイロは家に帰り、カードゲームに興じるだろう。ナポレオンの理髪師がアウステルリッツの戦いの指揮を任されたと想像してみてください… しかし、教会は存続し、神学校も存続し、代子も存続していた。脳卒中を起こすというような問題解決もなく、壁に張りついて、視線を落とし、待っていた。

「さあ、行ってらっしゃい」リタ夫人は彼に帽子とステッキを渡しながら言った。

どうすることもできなかった。理髪師はかみそりを道具入れにしまい、剣を手にして、戦場へと向かった。ダミアンはほっとした。外見上は変わらず、落胆した様子で床を見つめていた。リタ夫人は、今度は彼のあごを引っ張った。

「さあ、夕食にしましょう。憂鬱な気分は捨ててね」

「彼は何かやりとげると思いますか？」

「すべてやりとげるでしょう」リタ夫人は自信ありげな様子で答えた。「さあ、スープが冷めてしまうわよ」

リタ夫人の陽気な性格と、彼自身の軽い性格にもかかわらず、ダミアンは夕食時には午前中ほど明るい気分ではなかった。彼は代父の気弱な性格を信用していなかった。しかし、よく食べ、夕食の終わりごろには午前中の遊び心を取り戻していた。デザートの中、居間から人の気配を感じ、自分を捕まえに来たのかと尋ねた。

「きっと娘さんたちだわ」

彼らは席を立ち、居間へ移動した。娘さんたちとは、毎日、リタ夫人の家と一緒にコーヒーを飲み、夜が更けるまで過ごしていた5人の近所の若い女性たちだった。

弟子の女の子たちは自分たちの夕食を終えると、作業用のクッションに戻った。その家に住んでいる者もいれば、外からやって来る者もいたが、リタ夫人はそれらの女性全員を統率していた。糸巻きのささやきと近所の娘たちのおしゃべりはあまりにも世俗的で、あまりにも神学やラテン語とはかけ離れた響きだったので、若者はそれらに身を任せ、他のことは忘れてしまった。最初の数分間は、近所の娘たちのほうに少し気恥ずかしさがああったが、それはすぐに消え去った。彼女たちのうちのひとりが、リタ夫人が弾くギターに合わせて流行歌を歌い、午後はまだたく間に過ぎていった。午後とも終わりに近づいた頃、リタ夫人はダミアンに、彼女がとても気に入った小話を聞かせてほしいと頼んだ。それは、ルクレシアを笑わせた話だった。

「さあ、ダミアンさん、遠慮しないでください。女の子たちが帰りたいと言っています。あなたたちもきっと気に入るはずよ」

ダミアンは従うしかなかった。通常、予告と期待は笑いの効果を薄めてしまうものだが、その小話は近所の娘たちの笑い声のうちに終わった。ダミアンは満足したもののルクレシアのことを忘れてはいず、彼女も笑っているかどうか確かめようと彼女のほうを見た。ルクレシアは何とかその日の作業を終えようと、クッションに没頭していた。彼女は笑っていなかった。あるいは、咳をするように、心の中で笑っていたのかもしれない。

近所の娘たちは立ち去り、日はすっかり暮れていた。夜が訪れる前、ダミアンの心は次第に沈んでいった。一体何が起きていたのだろうか？彼は何度も、格子越しに外をのぞきに行っては、ますます落胆して戻ってきた。代父の影すら見当たらない。きっと父親が彼を黙らせ、ふたりの黒人を呼びつけ、警察署へ行って徒歩で巡回する警察官を要請し、そうして彼を力づくで捕まえ、神学校へ連れ戻すつもりなのだろう。ダミアンは、その家に裏口がないカリタ夫人に尋ねると、裏庭へ走っていき、多分塀を飛び越えられるだろうと判断した。彼は、ヴェアラ通りへ逃げる方法があるかどうか、あるいは近所の人に頼んで彼を受け入れてもらったほうがよいかどうかを知りたがった。最悪なのは制服だった。もしリタ夫人が彼に古い外套を用意してくれれば… リタ夫人はちょうど、ジョアン・カルネイロの置き土産、あるいは忘れ物の外套を持っていた。

「亡くなった夫の上着があるわ」彼女は笑いながら言った。「でも、どうしてそんなに怖がっているの？ すべてうまくいくから安心して」

夜が更ける頃、代父の奴隷が、リタ夫人宛ての手紙を持って現れた。まだ話はまとまっていなかった。父親は激怒してすべてを破壊しようとした。そして、いいや、あのバカ息子は神学校へ行くか、さもなければアルジュベカ監獄船に放り込むかだと叫んだ。ジョアン・カルネイロは、ダミアンの父親がすぐに決断を下さないよう、一晚考えて、そんなに反抗的で悪癖だらけの息子に神の道を歩ませるのが適切かどうかよく考えるよう懸命に説得した。手紙のなかで、彼は、父親を打ち負かすためにそう言ったと説明した。勝利を収めることがで

きたかどうか定かではないが、翌日、その男に会いに行き、再び主張するつもりだ。手紙の最後には、その若者を自分の家に來させるよう書き添えてあった。

ダミアンは手紙を読み終えると、リタ夫人を見た。「他に救いの手はない」と彼は思った。リタ夫人は角製のインク壺を持ってくるよう命じ、その手紙の半分にこう返事を書いた。「ジョアンジーニョ、その青年を救うか、さもなければ私たちは二度と会うことはない」彼女は封をして、それを奴隷に渡して、急いで届けるよう命じた。そして、再び謙虚さと落胆の頭巾をかぶった神学生を励ました。安心しなさい、この件はもはや彼女が引き受けるから、と。

「私がどれほど頼りになるか見ておいってください！いいえ、私は冗談を言うような人間ではありませんよ！」

作業したものを回収する時間だった。リタ夫人はそれらを確認した。すべての弟子たちは作業を終えていた。ルクレシアだけがまだクッションを前にして、もはや見ることもせずに糸巻きを動かしていた。リタ夫人は彼女のそばへ近づき、作業が終わっていないのを見て激怒し、彼女の耳をつかんだ。

「ああ！この怠け者！」

「奥様、奥様！神様の愛にかけて！天におられる聖母マリア様にかけて！」

「怠け者め！聖母マリア様は怠け者を守ったりしない！」

ルクレシアは力をふりしぼり、女主人の手から逃れ、家の中に逃げ込んだ。夫人は後を追って彼女を捕まえた。

「こっちへ来なさい！」

「奥様、お許してください！」黒人の女の子は咳をしていた。

「許すもんですか。棒はどこにある？」

そしてふたりは居間に戻った。ひとりには耳をつかまれて、もがき、泣き、哀願し、もうひとりには「だめよ、罰を与えるわ」と言い張っていた。

「棒はどこ？」

棒は居間の反対側の長椅子の枕元にあった。リタ夫人はその娘を放したくなかったので、神学生に向かって叫んだ。

「ダミアンさん、その棒を取ってくださいませんか？お願いします」

ダミアンは冷たくなった…残酷な瞬間だ！彼の目に雲がかかった。そう、彼はその小さな女の子をかばってやると誓っていたのだ。彼のせいで、作業を遅らせてしまったのだから…

「その棒をください、ダミアンさん！」

ダミアンは長椅子のほうへ歩き出した。すると、黒人の少女は彼に懇願した。この世にある最も神聖なものすべてをかけて、母にかけて、父にかけて、私たちの主にかけて…

「助けてください、若いご主人様！」

顔を真っ赤にして目を大きく見開いたリタ夫人は、今や咳が止まらなくなつた黒人の少女を放すことなく棒をせがんだ。ダミアンは胸が痛んだ。しかし、彼は神学校をどうしても抜け出さなければならなかった！彼は長椅子のところへ行き、棒を手に取り、リタ夫人に渡した。

底本 Machado de Assis, *50 contos de Machado de Assis*. Seleção, introdução e notas John Gledson. São Paulo: Companhia das Letras, 2007, pp. 426-432.

注

¹ マシヤード作品とブラジルの奴隷制の関係性については、拙論「マシヤード・デ・アシス“Pai contra mãe”―奴隷制と文学」において問題提起している。

参考文献

Assis, Machado de. *50 contos de Machado de Assis*. Seleção, introdução e notas John Gledson. São Paulo: Companhia das Letras, 2007.
Bosi, Alfredo. *Machado de Assis*. São Paulo: Publifolha, 2002.
平田恵津子、「マシヤード・デ・アシス“Pai contra mãe”―奴隷制と文学」、『ブラジル研究』第17号、pp.21-37、2021年。